

# 85歳で自分史「私の一代記」を発刊する

勉強が好きで  
多感な少年

昭和38年5月、武田春治郎著の「私の一代記」が出版された。

明治、大正、昭和と三代を経てきた85歳の人物が自分の一代記を発刊したわけである。

「実をいうと昨年末、がんこうけい眼光炯炯とした一老人が、米屋本店の御隠居さんの紹介で資料館に私を訪れて来た。そしてザラ紙に一面認められた原稿を「私の一生の記念を本にしたいので、見てください」とのことであった。原稿用紙に書かれてあるならばともかく、このままでは字数を数えるのも困難なので、一度清書してはと言ってお別れした。しかし、本人の再三の依頼と熱意に動かされ、「序に寄せて」を書かれた大野政治(元成田市史編纂委員長)の親身な協力によって、このおもしろい人物伝の発刊ができたのである。

武田 春治郎(ただ・はるじろう)

明治12年成毛に生まれる。和田の武田家に婿入りし、農業に従事。中郷村村会議員になり、多くの問題解決に力を注ぐ。85歳で自分史「私の一代記」を発刊する。



春治郎は、明治12年(一八七九)、久住村成毛348番地(現成田市成毛)に父小泉太郎左衛門、母きんの二男として生まれた。

勉強好きで小学校がない時代、遠路をいとわず安西の木内忠亮(易学、漢学)の塾に学んだ。

多感な少年は家出をしたり、成田山で断食修業に入って上人を夢見たこともあった。

青年期には青年団を結成したり、当時、ランプで暮らしていた区に電灯を引いたり村活動もした。

## 成田町の糞尿問題を解決

明治33年(一九〇〇)、成田市和田の武田鉄太郎、けいの二女たきと結婚。当時、武田家は田が4反歩、畑と山林で3反6畝の農家で、家族は祖父父母、両親、妻と春治郎の六人であった。

春治郎は田んぼや畑の借入れをし、野菜行商や養蚕業もしたが、経営の苦しさは変わらず、糞尿くみ取りの商売を始めた。当時、農家は成田町からく

み取った糞尿を肥料として使っていた時代で、農家から受け取る代金は一樽50銭、10樽で5円。しかも1日に2、3回は運べたので、家計の足しになった。

しかし、ある日くみ取り先で、急に馬が動いたので駆け落ち、頭から糞桶をかぶってしまった。金が欲しいからといって、こんな糞商売はやめることとなる。

この間、一男四女を育てたが、三女のハルは1歳で亡くなっている。

春治郎は、この間の生活ぶりを「第五章四人の幼子を抱えて貧乏と戦つ」として田植や、蚕の飼育のために、尋常3年生の子を欠席させたつらい時代を嘆いている。

このころ、春治郎の人生に特筆すべき、成田町の糞尿問題が起きた。

問題の発端は、遠山村などの農民が成田の糞尿は、くみ取らないと争議団を結成し、その人数が約200人に及んだことである。





成田町も非常に困却し、近隣の村長区長を招いて調停に乗り出した。

このときの中郷村長が吉岡儀助（大正10年4月18日～大正12年9月30日）で、春治郎は区長であった。

成田役場には羽織袴の旅籠主、成田町長宮崎広（明治45年1月～大正13年8月）八生村長大沢熊五郎（大正10年5月～大正12年8月）公津村長鈴木亮（大正11年8月～大正12年4月）成田警察署長らが集まった。

春治郎はここで、「私は争議団員でもなく扇動者でもありませんが、糞尿は

汚い物であり、臭気も甚だしいものです。ご列席のみなさんに一荷百円をやるからくんでくれといつても誰一人承諾する者はいないはず。しかし、百姓は二荷糞白一升ずつ旅籠に支払っています。ところが化学肥料ができた今日、あの汚いものを重労働をしながらくみ取る馬鹿はいないといつところから糞尿問題が起ったのです。従って私は急進的といつことではなく、漸進的に無料といつ事に皆様の反省を求めます」（私の一代記）

約40分間の長演説にもかかわらず「武田君、ぜひこの問題を解決していただきたい」という双方の頼みで最終的には「漸進的に無料」といふ春治郎の案で解決をみたのである。まさに春治郎の善尿かぶりのケガの功名であった。

### 中郷村の村会議員に

大正から昭和にかけて孫の静子、勇が誕生した。

後に県庁職員となる勇は、「吾が人生（前編）」「激動50年（戦後県庁一筋の道）」を祖父の一代記に引用して刊行している。

昭和7年、53歳のころ春治郎は、「ラシャヤ」と呼ばれて当時イワシで好況な九十九里方面に、外資、洋品物など



赤荻保育園正門左に立つ学校統合の「記念碑」

の行商中であつたが、吉岡儀助、村長吉岡義孝消防団長のすすめを受けて村会議員に立候補し、当選見込みはないといふ春治郎であつたが、31票を得て第3位で当選した。

初村会で春治郎は、中郷村財政の軟弱、中郷村行政の紊乱、村長になる馬鹿はなくなる、の3点について演説をした。特に、「村長になる馬鹿はなくなる」といふことについては、当時の村会議員らが会合の後、酒宴を行つたが、その費用はすべて村長持ちである。こつた実例をあげながら、「村長になる馬鹿はなくなる」と演説したのである。

第2次村議会で春治郎は、「議員は無報酬たるべきこと」といふことの提案をした。当時は、大変不景気な時代であつたので16人の議員に支払われていた一村会1円の報酬、合計16円をなくすべきであるといふ動議を提出したの

である。ところが、議員の一人から20銭位に位置つけてはこの動議があり、多数で議決された。しかし、春治郎は一人80銭あて合計12円80銭村経済を補足することができたと喜んだ。

2年生議員になって春治郎は赤荻役場より寺台までが、悪い道路であることから、米屋本店、諸岡長蔵が道路改修に熱心なことを聞いて陳情し、この道路改修を成功させている。

### 50年来の懸案 学校統合を実現させる

3年生議員になった春治郎は、有志と計つて中郷村の分教場の合併問題に取り組んだ。中郷村では、赤荻に新しい学校ができたが、北部の分教場からはここに入学せず、村の学校は南北に分かれている状態であつた。

春治郎は、この学校統合問題にも力を注ぎ、50年来の懸案を解決する。

こつして春治郎は奇抜とも思える人物であつたが、公共心と村政への貢献には敬服すべきものがあつた。

昭和43年2月3日、90歳で安らかな人生を閉じた。

平成12年、孫の藤代静子が、春治郎の「私の一代記」を自分の子孫に伝えていきたいと再版している。（文中敬称略）